

レジュメ作成と ビジターセッションにおけるレジュメ発表

Resume Preparation and Resume Presentation in Visitor Session

数野恵理・金庭久美子
KAZUNO Eri, KANENIWA Kumiko

〔要旨〕

本稿では初年次の正規学部留学生を対象とした日本語科目で実践したレジュメ作成と日本人学生の参加したビジターセッションにおけるレジュメ発表の活動を報告する。インタビュー調査の結果、留学生は一連の活動が自身の大学での学びに役立っていると実感している一方、日本人学生は留学生のレジュメをわかりやすいと評価しており、活動が機能していると言える。また、ビジターセッションは、普段から日本人学生と交流している留学生にとっても、専門の授業に近い形で練習する場となり、緊張感を持って普段以上に真剣に取り組むことができるとともに、日本人学生にも、異文化交流のみでなく、新しい知識や視点を得る機会、外国語学習の姿勢や自身の日本語力を振り返る機会となり、双方にとって意義があることがわかった。一方、留学生はビジターセッションで日本人学生にフィードバックを期待していることも明らかになった。

Key word: レジュメ、発表、ボランティア、ビジター、アカデミック・ジャパニーズ



1. はじめに

立教大学の正規学部留学生は、初年次の春学期に「大学生の日本語」のAとB、秋学期にCとDを履修する。どちらもアカデミックな日本語力の習得を目指しているが、AとCは口頭発表、BとDは読み書きに重点を置いている。BとDではレポート作成のほか、レジユメの作成と発表をしており、2019年度のDではレジユメ発表の日にビジターセッションを行い、ボランティアの日本人学生にも参加してもらった。本稿ではこのレジユメに関する実践について報告し、留学生とボランティアの日本人学生を対象としたインタビュー調査の結果から、1) レジユメの作成と発表という活動が機能しているかを評価し、2) 中級後半から上級レベルの正規学部留学生のクラスでビジターセッションをすることの意義を述べる。

2. 先行研究

本稿では、大学生の初年次教育の留学生を対象とした「大学生の日本語」BとDにおけるレジユメの作成と発表の活動と、発表活動の際にビジターセッションを行った結果について報告する。そこで、レジユメを扱った授業、ならびにビジターセッションについての先行研究を概観することにする。

2.1 レジユメを扱った授業

まず、レジユメを扱った授業についての研究には、鎌田（2005）、茂住（2005）、平山（2013）、深川他（2016）、和田（2018）などがある。

鎌田（2005）は、レジユメや提示資料に関わる日本語指導について、当時は留学生向け日本語教材でごく一部しか扱われていないことを指摘し、レジユメや提示資料の指導の必要性を述べている。鎌田は、留学生のレジユメを分析し指導項目を洗い出し、大学の日本語授業でレジユメの指導を行っている。具体的には、見出しのつけ方、レジユメとは、用紙の使い方、各項目を書く位置、番号のつけ方、箇条書き、語や文の名詞化、名詞化に伴う助詞変化、わかりやすい箇条書きなどである。その結果、簡潔にまとめることの意識化を図ることが可能になったと述べている。

茂住（2005）は、大学におけるアカデミック・ジャパニーズの練習の一つとして資料に対するレジユメ作成の活動を行っている。レジユメを作成するためには、1) 重要なポイントやその比重を押さえることのできる読解、2) 内容同士の関係を考え、その階層を組み立てられる構成員力、3) 簡潔な表現で箇条書きできる表現力、の三つが必要であるが、作成されたレジユメからこれらの点に問題を抱える学生がおり、今後の指導方法が課題であると述べている。

一方、平山（2013）は、予備教育の大学院進学課程に在籍する学生に対し、複数のビデオ教材に対しワークシートを用い、レジユメを作成する活動を行っている。扱ったビデオ内容の評価はさまざまであったが、授業アンケートの結果、「レジユメ作成と発表・質疑応答」については、

多くの学生が能力向上を実感したと報告している。

深川他（2016）は、大学における日本人と留学生を対象に、日本人学生のレジュメ 66 本と留学生のレジュメ 15 本に対し分析を行っている。その結果、両者に共通して見られた問題点は 1) 研究テーマの設定、2) 論理構成、3) 引用の仕方、4) アカデミックな場面での日本語表現の使用であることが明らかになったという。また、留学生には、特に 4) アカデミックな場面での日本語表現の使用において日本語の基礎的知識と運用力の指導が必要であるということである。

和田（2018）は、専門分野の異なる交換留学生を対象に協働学習として、レジュメ作成と複数回の発表を行っている。レジュメ作成はペアで行い、発表の際は 1 人ずつになり、他の内容のレジュメを作成した者と内容の情報交換を行うというものである。学生の活動を観察した結果、①単語、文、段落、②執筆意図、③文章の構造などの理解の確認と修正が行われ、さらに、④レジュメに使う日本語の確認、修正、吟味、⑤より効果的な説明の仕方、レジュメの構成についての検討が行われ、深い読みが観察されたということである。

いずれの研究も、レジュメ作成の指導の必要性を述べており、レジュメ作成に必要な具体的な項目を挙げている。本実践においても同様の項目に留意しながら、学生のレジュメを観察することにする。また、和田（2018）の協働学習の方法は、本実践の行う方法に類似しており、参考にすべき点がある。

2.2 ビジターセッション

立教大学日本語教育センターにおいては、日本語クラスにビジターやボランティアを招くということを積極的に行っている。具体的には、中上級学習者向けのビジネス会話のクラスに元ビジネスパーソンを複数回迎えたり（栗田他 2016）、短期プログラムの初級会話クラスにボランティアとして日本人学生に参加してもらったり（藤田他 2019）しているが、これまで正規学部生の初年次クラスでビジターセッションは行われていない。

本実践においては、正規学部 1 年生の留学生のクラスに日本人学生を招き、ビジターセッションを行う。従来さまざまな機関においてビジターセッションが行われてきており、留学生自身の評価、教師の評価、ビジターの評価などについて複数の報告がなされている（村岡 1992、赤木 2013 等）が、本研究では、留学生自身の評価だけでなく参加したビジターの意識にも注目したい。参加した日本人学生の意識に注目した研究として、永井（2012）、桑原他（2020）などがある。

永井（2012）では、留学生向けの中級文法・会話クラス、中級作文クラス、上級ビジネス日本語クラスに日本人学生を招いている。その目的は「①留学生の日本語運用力の向上、②日本人学生と留学生の交流の場の提供および以後の継続的な交流への懸け橋、③日本人学生が持っている外国人に対する意識の変革」（永井 2012、54）である。日本人学生の多くは留学生と話したいと思っていたが機会があまりなかったという。永井（2012、60）は「日本人学生全員がビジターセッションに参加したことで、留学生や国際交流に対する意識が変化したと答え、日本語授業におけるビジターセッションが日本人学生の国際理解教育としての意義もある」と述べている。

桑原他（2020）では、大学の「コミュニケーションのための日本語教育論」の受講生である日本大学生が日本語学校を訪問し、留学生との交流を行ったことについて報告している。日本大学生の目的は、「日本語能力が十分ではない日本語学習者と日本語で話す経験を通して、自分自身の日本語の使用を客観的にとらえる機会を得る」「さまざまな背景を持った同年代の外国人留学生と、多様な話題について話すことを通して視野を広げる」（桑原他 2020、2）ことである。大学生が参加した授業はケーススタディの「クラス発表の準備」についての話し合いの時間であった。その結果、参加した日本大学生は非母語話者向けに自分の日本語を調整することが難しかったということである。また、これまで自明と思っていたことに対して、外国人の視点が留学生と日本人との違いへの気づきを促すきっかけとなった一方で、類似性があることも認識したという。

一連の研究結果から、日本語クラスに参加した日本大学生に大きな意識の変化があったことは明らかである。本実践では、会話ではなく、より専門の授業に近いレジュメの発表活動である。その中で、留学生と日本大学生がどのような交流を行い、何を考えたのか見ていくことにする。

3. 科目の概要

本稿では「大学生の日本語」A～Dのうち春学期開講のBと秋学期開講のDにおける実践を報告するが、まず、「大学生の日本語」の概要について述べる。「大学生の日本語」は初年次の正規学部留学生を対象とした科目だが、「総合日本語6-8」という科目が併置されており、短期留学生と正規大学院生も同じ授業を受講することができる。正規学部生は春のBと秋のDを続けて履修するが、短期留学生と正規大学院生は春学期のBのみ、あるいは秋学期のDのみを履修することもできる。そのため、Dのクラスは新しく加わる学生も無理なくついてこられるよう、レジュメやレポートの基本を復習しながら進めている。なお、立教大学日本語教育センターでは日本語のレベルが0から8まで9レベルあり、この科目は、J6、7、8という中級後半から上級の3レベルの学生が一つの教室で共に学ぶクラスとなっている。

本稿で報告するのは、筆者が担当した2019年度春学期の「大学生の日本語B（社営）6-8」と秋学期の「大学生の日本語D（社営）6-8」（以下、「大学生の日本語」BとD）であるが、どちらも「総合日本語6-8」が併置されており、BまたはDのみ履修する短期留学生と正規大学院生がいた。

4. 実践報告

4.1 各学期の流れと内容

「大学生の日本語」BとDはどちらも表1に示すスケジュールで100分授業を14回行い、学期毎に2つの大きなテーマを扱っている。それぞれのテーマについて、1) 共通の資料を読み、内容理解の確認やディスカッションをする、2) 資料AまたはBを読みレジュメを作成し、担当資

料について発表してディスカッションをする、3) 制限時間内にリアクションペーパーを書く、4) アウトラインを準備した上でレポートを作成するという活動を行なう。このようにアカデミックな日本語力を養成している。

表1 「大学生の日本語」BとDの流れ

回	授業内容	提出物・クイズ
1	授業概要、大学で必要な日本語力とは	
2	テーマ①-1 導入と共通資料の読解活動	読解①読みのヒント提出
3	テーマ①-2 書く技術の導入（レジュメの書き方1）	テーマ①漢字クイズ
4	テーマ①-3 レジュメ発表とディスカッション	レジュメ①提出
5	テーマ①-4 書く技術の導入（リアクションペーパーの書き方とレポートの書き方1-1）	授業時間内にリアクションペーパーを書いて提出
6	テーマ①-5 書く技術の導入（レポートの書き方1-2） レポート準備（ピア活動）	小レポートのアウトラインと使用する資料の提出 表現クイズ①
7	テーマ①-6 ピア・エディティング活動	小レポート①事前提出
8	テーマ②-1 導入と共通資料の読解活動	小レポート①編集後提出 読解②読みのヒント提出
9	テーマ①-7 レジュメと小レポートのフィードバック	テーマ②漢字クイズ
10	テーマ②-2 書く技術の導入（レジュメの書き方2）	レジュメ①再提出 小レポート①再提出
11	テーマ②-3 レジュメ発表とディスカッション *「大学生の日本語D」はビクターセッション	レジュメ②提出
12	テーマ②-4 書く技術の導入（レポートの書き方2）	表現クイズ②
13	テーマ②-5 ピア・エディティング活動	小レポート②事前提出 →授業終了時にレポート②編集後提出
14	テーマ②-6 レジュメと小レポートのフィードバック	
翌週		レジュメ②再提出 小レポート②再提出

4.2 レジュメ作成と発表の授業

ここでは、2) 資料AまたはBを読みレジュメを作成し、担当資料について発表してディスカッションをするという実践について具体的に説明する。大学の演習科目などでは資料を分担してレジュメを作成し、発表することがあるため、この力を養うことが本活動の目的である。まず、レジュメの作成方法を学んだ後、教師の準備した資料AとBのいずれかを読み、レジュメを作成する。そして、作成したレジュメを見せながらペアでお互いに発表し合った後で、グループでディスカッションを行う。最後に添削されたレジュメを書き直す。資料AとBを分担する形を

とっているのは、全員が同じ資料を読んでそれについてレジюмеを作って説明するよりも、別の資料について説明し合うほうが、動機づけとなると考えられるためである。以下では、授業内容を詳しく述べる。

春学期のBの第3回の授業で、レジюмеの作成方法を導入した(表1参照)。まず、立教大学大学教育開発・支援センター(2012、2018改訂)による『Master of Writing』の「レジюмеの作り方」を提示し、テキスト・文献を読んで報告する場合のレジюмеの例を確認した。次に、不適切な箇所の多いレジюмеの例を示し、何が問題か、どのようにするとよくなるかをグループで考えさせ、クラス全体で意見を共有した後で、書き直したよいレジюмеの例を提示して、必要な情報や体裁の整え方を確認した。テーマ1は「国際共通語」というテーマで、『上級日本語教科書 文化へのまなざし』にあるAとBの2つの資料を扱い、学生の半数が資料A、半数が資料Bを読んで各自レジюмеを作成した。それぞれの資料をどのようにまとめればよいかイメージが持てるように、ワークシートを準備し、空欄を埋めてレジюмеの最初の部分を作る練習もした。最後に、資料AまたはB(いずれも8～10ページ)に対し1.5～2ページでレジюмеにまとめるように指示し、レジюмеの評価基準を説明した。

第4回の授業では各自が作成してきたレジюмеを発表した。まず、担当資料の書誌情報を伝えてから資料の内容の説明をするなど、発表の仕方を簡単に確認した。次に、図1のように、同じ資料を読んできた学生同士でペア(または3人)になり、お互いにレジюмеを発表し合う練習をし、この資料を読んできたことについて意見交換をし、さらに、レジюмеで修正すべき箇所があるかなどをコメントし合う時間をとった。その後、資料Aを読んだ学生とBを読んだ学生がペア(または3人)になるようにして、お互いの読んできた資料について説明し合い、質問したり意見交換をしたりする時間を設けた。そして、クラス全体の前で、同じ資料を担当してきた学生にそれぞれ資料AとBについてレジюмеを発表させ、内容に間違いがある場合や重要な箇所が抜けている場合には教師がフィードバックをした。最後に、4～5人のグループでディスカッションをして、その内容を口頭で短く報告させた。

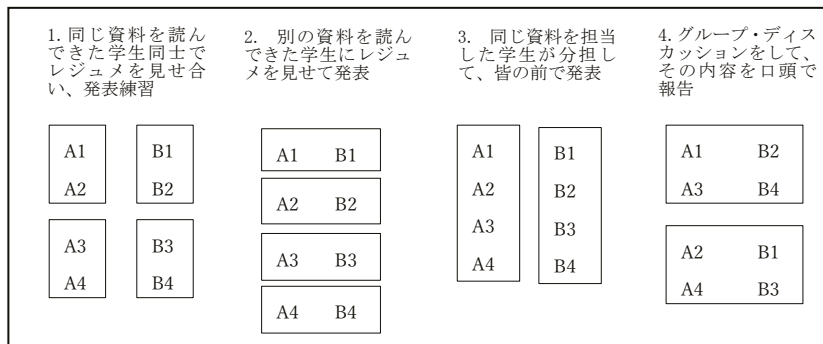


図1 レジюмеの発表

提出されたレジュメは添削・評価をして、後日それぞれの学生にフィードバックをし、書き直したものを再度提出させた。ここまでがテーマ1のレジュメ作成と発表の活動である。

茂住（2005）はレジュメ作成において1）重要なポイントやその比重を押さえることのできる読解、2）内容同士の関係を考え、その階層を組み立てられる構成力、3）簡潔な表現で箇条書きできる表現力、の三つが必要であると指摘している。茂住の指摘した三つのポイントを押さえるため、本実践では、同じ資料についてレジュメを作成した学生に、お互いのレジュメを見ること（図1の1番）で学生同士の違いを認識させ、さらに教師からのフィードバックをもとに問題点を修正させ、次につなげることを意図した。

春学期後半のテーマ2は『上級日本語教科書 文化へのまなざし』の「フリーターと仕事」をテーマとし、基本的な流れはテーマ1と同様に行った。第10回の授業では、ナンバリングや記号の使い方、名詞化、箇条書きについて説明・練習した上で資料の冒頭を空欄補充形式でまとめる練習をし、次回までにレジュメを作成するように指示した。第11回で発表とディスカッションをし、テーマ1同様、提出されたレジュメは添削・評価をして、後日それぞれの学生にフィードバックをし、書き直したものを学期末に提出させた。

秋学期のDでは、テーマ1は『上級日本語教科書 文化へのまなざし』の「個性と学び」を扱った。テーマ2は、専門の授業により近い形にするため、「AI」をテーマとした2種類の新書の一部（12～15ページ）を用いた。レジュメ作成と発表の流れは春のBとほぼ同様だが、Dの第11回の授業は日本人学生を招き、ビジターセッションを行った。以上がレジュメに関する実践の内容である。

4.3 ビジターセッションにおけるレジュメ発表の授業

上述のように、秋学期のDのクラスでは、第11回のテーマ2のレジュメ発表とディスカッションに日本人学生を招き、ビジターセッションを行った（表1参照）。

立教大学では日本語の授業に日本人学生を招きビジターセッションを行うことがあるが、これまで正規学部1年生のクラスではビジターセッションをしていなかった。正規学部留学生であれば普段から日本人学生と同じ授業を受講しているため、日本語科目の中でビジターセッションを実施しなくても日本人学生と交流する機会はあるだろうと考えていたからである。しかし、学部の授業で日本人学生に囲まれた中で発言したり発表したりするのは緊張するという声も耳にするため、このクラスでもビジターセッションを行うことにした。

立教大学では日本語授業ボランティアの制度があり、国際センターの「国際交流ボランティア」に登録している学生に対し、日本語授業ボランティアの募集情報を案内している。今回は3名の日本人学生がビジターとして参加してくれた。

日本人学生にはトピックと授業概要のみ知らせ、事前準備はせずに参加してもらった。同じ資料を担当した留学生同士の発表練習を1度、別の資料を読んできた留学生との発表を2度し、留学生2名のペアに日本人学生にも加わってもらった。留学生に対して日本人学生の方が少なかっ

たが、レジユメの発表で必ず一度は日本人学生と同じグループになるようにした。最後に、日本人を含む5～6人のグループに分かれ、このテーマでディスカッションをした。

5. 授業の分析

5.1 調査方法

本調査は、以下の点について明らかにすることを目的としている。一つ目はレジユメの作成と発表という活動が機能しているかを評価すること、二つ目は中級後半から上級レベルの正規学部生のクラスでビジターセッションをすることの意義と課題を探ることである。そこで、2020年1月にビジターセッションに参加した者に半構造化インタビューを行い、その録音から文字化データを作成した。インタビューでは事前に用意した質問に加え、協力者に自由に語ってもらった。

調査協力者は「大学生の日本語」BとDを履修しビジターセッションの回に出席していた正規学部留学生とボランティアの日本人学生のうち、正規学部留学生3名と日本人学生2名である。協力者の留学生の詳細を表2に示す。日本人学生Xは4年生、Yは2年生である。

表2 協力者の正規学部留学生の背景

留学生	国籍	日本語レベル	入学前のレジユメ作成経験
A	韓国	春学期 J6 → 秋学期 J7	なし
B	韓国	春学期 J7 → 秋学期 J8	なし
C	中国	春学期 J7 → 秋学期 J8	あり

5.2 留学生を対象としたインタビュー調査の結果とまとめ

5.2.1 レジユメの作成と発表という活動に対する留学生による評価

留学生A～Cのインタビューの回答のうち、レジユメの作成と発表の活動に関する回答結果を具体的に見ていく。

まず、各学期2回実施したレジユメ作成と発表の活動の感想と特にどの活動が役立ったかについて、回答結果を表3に示す。

表3からわかる通り、3名とも長い文章の重要な箇所がどこかを判断してまとめていく活動が重要だと認識しており、大学生活でどのような日本語の力が重要か、自分には何が必要かということをしっかり理解した上で、この活動を評価している。

その他、レジユメ作成の際、サンプルを示したことについて、以下のように回答している。

留学生A「書き方とか見てわかったことが良かったと思います。穴埋めみたいなところがあって、どういところをとったらいかがわかっていいと思います」

留学生B「動詞を名詞化する練習をしたのもよかったし、空欄を、サンプルとして空欄を埋めるというのも、今後レジユメをどう作ればいいかという、方向を、ちょっと考えるのにす

表3 留学生の回答：レジュメの全体的な感想と役立った活動

留学生	回答 ①レジュメ作成と発表の活動についての感想 ②特にどの活動が役立ったか
A	①いいと思いました。なんか、韓国とかでは、 <u>実際レジュメを書く機会がなかったし、他のクラスでもそういう練習とかできなくて、そういうところでちょっとできて、レジュメの書き方できたことがよかったことで、要点だけ自分が取って、あれ、どうやって要約したらいいかみたいなこと</u> を取り組んでいくことがいいなと思いました。 ②自分が <u>要点を探すのがちょっと苦手</u> で、そういう点で練習できたんじゃないかなと思いました。
B	①ええ、レジュメっていう、初めて作ったので、その作り方とか、どう作っていけばいいかわからなかったんですけど、 <u>授業でしっかりと学んで、サンプルとかあるんじゃないですか、サンプルを参考にしながら、資料の重要な部分をまとめて、レジュメに作成してという活動が初めてだったので、新鮮だったし、自分のアカデミックな日本語スキルを高めるのに</u> すごく役に立ったんじゃないかと思います。 ②んん、授業で、そういう引用の仕方、引用はレジュメではあまりやらなかったんですけど、そういう書き方を学んで、それに基づいてレジュメを作成して、あと、 <u>すごく役に立ったのが、クラスメイトに説明するという作業が、自分の中で内容を落とすっていうか、理解するのに、すごく役に立って、あとのレジュメ作成においてもすごく内容をわかりやすく整理するのに役立った</u> と思います。
C	①ええと、んー、私は役に立っていると思います。えーと、なぜと言うなら、 <u>大学に入ってから、あのいろいろな資料を読まなければいけないですし、えーと、それについてうまく理解しているか、んー、それと理解したあと、うまく他の人に説明できるか、それはやはり大学に入ってから</u> の重要な部分だと思います。その2つについてそういう練習できてよかったと思います。 ②そうですね。んー、文章を、んー、文章をあの、 <u>長い文章をまとめてレジュメに書くところ</u> があの一役役立ったと思います。

「すごくよかったと思います」「(空欄補充でレジュメの一部を作るワークシートは) ちょっと、この部分は個人的にここで十分練習したと思ったので、ちょっと重複したんじゃないかなと」

留学生C「最初は一度自分がイメージしたレジュメが、あと先生が教えてくれたあのよい例を見て、自分のあのレジュメがどこが足りないとか、どこが悪いとか、あの、すぐわかりました」「以前日本語学校で作ったものは、余白や記号がなく見にくいものでした」

ここから、レジュメのサンプル提示はそれを見ることでいろいろな気づきがあり、効果的であったが、空欄補充のワークシートで毎回練習する必要はないと思った者もいることがわかった。

また、レジュメを見せて発表し合う活動について、留学生Aは次のように回答している。

留学生A「それもなんか自分がどこをとって、違いがわかって、なんか自分がちょっと必要ないところをとったのかなとか、他の人はそういうところが重要だと思ったとかわかってよかったんですけど、そんな準備できていない人がいたらちょっとグループ活動が難しい」

留学生Aは、他の学生のレジュメを見ることで、レジュメに必要な箇所がわかってよかったが、しっかり準備をしてこない学生がいるとグループ活動がしづらいと述べている。協働学習の効果が窺われる一方、グループ活動の難しさの一面も見られる。なお、Aは他の学生のレジュメを

見てもどの部分を削るとよいかわからない場合は、教師からのレジユメのフィードバックが役立ったと述べている。

次に、学部の授業でもレジユメ作成をしたか尋ねると、留学生 B のみが作成したと回答した。学部の基礎演習で日本人学生たちとグループになり、先行研究をまとめたレジユメとアンケート調査の結果をまとめたレジユメを作る課題があり、B が代表でレジユメ作成を担当したという。C は、レジユメは作っていないが、基礎演習などで調べた資料についてグループのメンバーに簡潔に説明する際、この内容が役立ったということである。

大学生活で実際にレジユメの作成が求められるかどうかは学部や履修している科目にもよるが、今回のインタビューでは、初年次の学部のクラスではレジユメ作成が求められなかった2名もレジユメ作成と発表の活動が役立つと認識していることが明らかになった。

今後、学部の授業やゼミでレジユメ作成や発表があった場合に自信を持ってできるかを質問すると、J7 レベルの A は「自信はそこまでないですけど、でも学んだことを活用して取り組めるとは思います」と回答した。J8 レベルの B と C は自信を持ってできるという。上述のように B は日本人学生とのグループでもレジユメ作成を担当している。

以上、3名全員が長い文章をレジユメにまとめること、それをクラスメートに説明し合うことが大学の授業で必要とされる日本語力を伸ばすために役立っていると評価しており、レジユメの作成と発表という一連の活動が機能していることが明らかになった。

5.2.2 留学生にとってのビジターセッション

次に、留学生がビジターセッションをどのように認識しているかを見ていく。まず、レジユメ発表の日に日本人学生に参加してもらうことについてどう思ったか、次に、日本人学生がいたことで違いがあったか尋ねた。回答結果を表4に示す。〈〉は筆者の発言である。

表4の回答が示すように、3名ともレジユメ発表の日に日本人学生に参加してもらうことを評価している。実際の学部の授業により近い形で緊張感を持って発表ができ、日本人学生が関心を持って聞いてくれるため、普段よりもはっきり説明したということが明らかになった。一方、留学生はビジターセッションでは日本人学生からもっとフィードバックがほしいと考えていること、普段の授業での留学生同士の活動に物足りなさを感じている学生もいることがわかった。

また、普段、日本人学生との交流があるかを尋ねたところ、3名とも授業でもプライベートでもかなり交流をしていることがわかった。しかし、全員ビジターセッションを評価しており、普段から日本人学生と交流がある学生にとってもビジターセッションは意義があるということが明らかになった。

表4 ビジターセッションに関する留学生の回答

留学生	回答 ① ビジターセッションの感想 ② 普段の授業との違い
A	<p>① まあ、なんか新しくて楽しかったんですけど、でもそっちのかたも仲良くないっていうか、どうしたらいいかわかんないまま進んじゃって、「いいと思います」しか皆言えないから、それについてはちょっともっとフィードバックもらったらいいなと思いました。〈仲良くないから？〉仲良くないっていうか、そもそも初めての人になんかフィードバックすることもちょっと言いにくいし、だから、だし、内容をわかっていないからこそ、ちょっとどこが足りないかわかんなくて、「いいですね」みたいなことしか言えないから、やるとしたら内容を知っているほうがいいかなと思いました。</p> <p>② 自分の資料、Aとか担当したら、Bはどうせ絶対読まないからって、ちょっと適当になった感もありますけど。〈え、説明がですか。〉自分が説明するとき、Bの人は興味持っていないし、正直言うと、そこまでちゃんと聞いてくれないから、自分もちょっと適当になった感もありますけど、でもそっちのなんかビジターのかたって知らないから、もっと詳しく説明できたことはいいと思いました。〈普段はBの人は知らないけど、ちゃんと、そんなにちゃんと聞いていなさそうってこと？〉そうですね。なんか、自分は自分の資料を調べてこれでもうレポートを書くからみたいな感覚がちょっとあって、人によって違うけど、そういう印象ちょっともらって、自分も、だからまあ自分もいや、みたいな感じなんですけど、<u>ビジターのかたはどっちも知らないし、どっちも聞きたいみたいな感じで聞いてくれたから、まあ、はい、そうですね。</u>〈ビジターのほうが興味を持って聞いてくれたってことですか。〉はい。</p>
B	<p>① 日本語のクラスで他の国の方々がいっぱいいてネイティブがいないんじゃないですか。だから、そういう意思疎通もそうだし、レジュメの書き方とか単語の選び方とか、皆それぞれだったんですけど、それぞれだから、そういう、何ていうか、<u>すごくまとまった、ちゃんと勉強してるっていう感じはあまり感じなかったんですけど、そういう、日本人の学生さんが来て、こういうディスカッションしたり、こういうレジュメの部分について、ここはどういう意味ですかを質問してくれたりしたのが、すごく、あの、日本で勉強しているの、日本人はどう考えるのか、みたいな、考え方とか、すごくわかり、わかるような機会だったと思います。</u></p> <p>② 〈普段だとあまり質問されない？〉自分で言うのもあれなんですけど、クラスの中では、あの普段ディスカッションしている学生の中で、私のレジュメが一番出来がいいので、それで、この人はいいだろうっていうすごく偏見があって、あまり質問されなかつたりしてますね。だから、本当に理解しているのかな、ちゃんと伝わっているかなって不安になつたりしました。</p>
C	<p>① 活動自体はいいと思いますが、日本人の学生さんたちは私たちの不足をあまり指摘してくれないですね。それは問題だと思います。あの、彼女らから見ると、絶対に私たちのプレゼンとかレジュメの紹介とか絶対いろんな問題があると思いますが、あまり指摘してくれないのが、困ります。ま、日本の文化もそういう部分があると思いますが、授業の時はそういう気遣いを捨てたほうがいいのかと思います。</p> <p>② 3人の日本人の学生は私たちにとって新しいメンバーだから、少し緊張したりとかやっぱりありますね。それに、あの、その3人の方はその前に資料とか読んでいないから、私たちは本当に一からちゃんと説明しないとイケないですし、<u>んー、そういう部分が自分にとっては挑戦だ</u>と思います。〈じゃあ、今回のように資料を読まずに来てもらうのはいいと思いますか。〉そうですね。〈さっき活動自体はいいと思うと言いましたが、どうして？〉さっきも言った通り、やはり、新しいメンバーが入ったから、自分たちの緊張感を持って説明しないとイケないです。それは本当の説明の時とよく似ている。あとはもしその活動でネイティブの、ネイティブの学生が、本当に自分が違うと思った視点を指摘してくれたらもっといいと思います。そのようなネイティブチェックの部分が、ネイティブチェックの部分が、あの一番重要だと思います。〈日本語を指摘してほしいってことですか。〉そうですね。日本語の不足とか間違った点とか。</p>

5.3 ボランティアの日本人学生を対象としたインタビュー調査の結果とまとめ

5.3.1 レジュメの作成と発表という活動に対する日本人学生による評価

ビジターセッションでは日本人学生に事前にトピックのみ知らせ、資料を読まない状態で留学生のレジュメ発表を聞いてもらった。ここではレジュメ発表のビジターセッションにボランティアとして参加してくれた4年生のXと2年生のYのインタビュー結果を見ていく。今回のクラスに参加した感想を表5に示す。

表5から、正規学部生のレジュメとその発表を好意的に評価し、学生同士で説明、質問し合う活動がよいと思っている様子が窺える。

留学生のレジュメや説明のわかりやすさについて質問したところ、XもYもわかりやすかったと述べたが、言葉の横にその説明があったり、記号を効果的に使ったりしているレジュメのほうのわかりやすかったということである。また、説明の際、自信がなくレジュメをただ口語調にして読み上げているだけの学生もいたと述べている。

質疑応答とディスカッションについては、XもYも、個人差はあるものの、質問に対して留学生は的確に答えており、ディスカッションでの発言も活発だったと回答した。Yによると、皆自分の意見をしっかり持っていて、自分の国の例も出して答えてくれたので、面白かったという。

日本人学生が履修している通常の大学の授業でこの学生たちが発表したらどうかを尋ねると、Xは「多分大丈夫だと思います」、Yは「全然大丈夫だと思います」と回答した。さらに必要なスキルがないかを尋ねると、Xはこれ以上必要ない学生もいるが、中には日本語を話すのがまだたどたどしい学生がいたので、早口で質疑応答があった場合は難しい場面があるかもしれないと回答した。また、Yはレジュメをただ読むだけの学生については、レジュメに書かれていないことも説明したり、グラフの効果的な提示をしたりできるようになるとよいと述べた。

以上のように、事前に資料を読まずに発表を聞いても、留学生の作成したレジュメや発表は概

表5 日本人学生の回答：ビジターセッションに参加した感想

学生	ビジターセッションに参加した感想
X	あ、なんか、留学生が想像以上に、うん、日本語がペラペラですごいびっくりしました。あと、なんか、日本語の文献、は、多分普通に大学生や社会人が読むようなものを使っていると思うんですけど、そういうのもそこまで読み解けて、しかも1年生とかの人でも、すごいちゃんと、でもレジュメも、すごい先生が作るようなしっかりしたのを作っていて、すごいなあと思いました。
Y	感想は、えっそうですね、個人的に、皆この日本語の、私でも結構こう語彙が難しい部分があって、これはどういう意味って聞いてしまう部分もあって、すごくレベルが高いなと思ったのと、あと、みんな、やっぱ生徒間同士でもこう質問し合ったりしていたのがすごく印象的だったのもありますし。何だろう、あと皆なんか、こう2種類しかなかったじゃないですか。だから皆同じ発表している人もいたんですけど、それぞれが違うから、お互いになんかここ足りなかったかなとか、そういうところが見えてくるのかなと思って。私も英語で、全く同じような授業があって、〈アメリカで?〉えと日本でですね。~の授業で、あの例えば2つあって、同じところカバーするんだけど、皆比べてみるとちょっと違ったり、だからものすごい面白いなと思いました。

ねわかりやすいものであり、日本語科目以外の大学の授業で発表をしたとしても大丈夫だと評価された。このクラスは読み書きが中心で、口頭能力は「大学生の日本語」のAとCで扱っているが、中にはまだ日本語が流暢でない学生やレジュメを読み上げているだけという学生もいるため、説明の仕方を工夫したり、質疑応答での力を磨いたりする必要があると言える。

5.3.2 日本人学生にとってのビジターセッション

ここでは、ビジターセッション、特に中級後半から上級の留学生を対象としたクラスでのビジターセッションが、留学生だけでなく日本人学生にとっても意義があるかを見ていく。

まず、これまでの留学生との交流について尋ねると、Xは正規学部留学生と交流したことはないが、短期留学の学生との交流はあると回答した。Yは一般の日本の高校を卒業した日本語母語話者だが、英語で学位を取得する学部にも所属しており、普段から日本人よりも留学生との英語でのコミュニケーションが多い。接する留学生は短期留学の学生が多いが、正規学部留学生とも接する機会はあるということである。

XもYも、2019年度春学期までは日本語授業のボランティアをしたことがなかったが、秋学期にそれぞれの事情で時間ができ、このクラスの他にも日本語クラスのボランティアに複数回参加したという。「大学生の日本語D」のビジターセッションに参加しようと思った理由を尋ねると、Xは卒業論文の準備に向けてアルバイトを減らしたので、隙間時間に息抜きができればいいと思って申し込んだという。Yは「テーマがそのAI、人工知能で、その留学生で、そのレベルの高いクラスということで、どういったディスカッションがあるのかとか、すごく興味があって、そうですね、それが一番の理由ですかね」と答えた。また、今学期は時間ができ「以前から立教のボランティアメールはいただいていたので、今回こういう機会に、なんかもうちょっと立教に協力できることができればいいなと思って」申し込んだということである。

ボランティアとしてこのクラスに参加することで、得るものがあつたか尋ねると、Xは「やっぱり、他の学生の、他の国の視点とか、そもそもAIに、なんか深く考えていなかったの、あのすごい、ああそういう見方があるんだというのがすごい面白かった」と回答した。Yは「こんなにも日本語、本当一生懸命学んでくれている人がいるんだなという驚きと、異文化交流っていう意味で、いろんな国の学生がいたので、いろんな文化をシェアできたり、知らないことを知れたりよかった」と回答した。そして、インタビューの最後に、Yは以下のように付け加えた。

ああ、でも私、本当、個人的なんですけど、思ったこと、このクラスが一番ボランティアに参加して、この異文化交流以上に学ばされた点をやっぱあって。この私日本にずっと住んでいたのに、こういう議題に対して、こう大学の日本語レベルっていうんですかね、ディスカッションしたことがないので、逆にちょっと置いてかれちゃったんじゃないっていう、感じてしまう面もあったので、個人的には反省の機会っていうか、そうなんです。反省の機会っていうか、なんかこんなに一生懸命こう学んでくれている人がいるのに、あ、いるからこそ、やっぱ同じレベルでっていうか、もっと何て言うんですかね、もっと自分の日本語レベルを高

めていって、っていうふうに思いましたね、はい。〈～だと英語がメインに（省略）〉そういう意味で、自分が例えば社会に出たときに、そのぐらいの日本語レベルを使えるかって言ったら、あ、ちょっと自分、今、下がってきているのかなって個人的にすごく思ったので。

「大学生の日本語」のようなクラスのボランティアを友人にも勧めたいか、その場合どのような点を勧めるかを尋ねると、XもYも勧めると回答した。勧める点として、Xは「すごいいろんな視点を得られるっていうのと、あと単純にすごいいろんな、まあいろんな国の意見が聞けて楽し、楽しいのと、ま、友達ができる場合もある」ことを挙げた。Yは以下のように述べた。

その異文化交流っていう意味もそうですし、そのディスカッションに対する姿勢っていうのがすごく学ぶべき点が多いなと本当に思って、何て言うんですかね、その言語の壁があっても恥ずかしがらない子が圧倒的に多かったし、逆に、私は日本にいて、そうずっと恥ずかしがって思っていたほうだったので、逆に見習いたいなっていう面もあったので、〈英語で話すときに?〉英語を話すときに、そうですね、私は大学に入るまで全然普通の高校とか中学とか行って、やっぱり皆の中に恥ずかしいっていうのがあって、例えばちょっと発音よく言ったら、格好つけてるとかそういうのがあって、そうそう、全くそういうのがないのかわからないですけど、感じさせないような、言語よりも、それより先に伝えたいことがあるというのがすごく皆の中に見えた感じがして、ね、そういう面で、うん、あの、そういう日本の学生が見たら何か刺激を受けるんじゃないかなと、そういう点で勧めたいですね。

インタビュー協力者は2名なので一般化はできないが、貢献したいという気持ちを行動に移す場となる、異文化交流ができる、新しい視点が得られる、一般の大学生や社会人が扱うような知的な話題でのディスカッションを楽しむことができる、外国語学習の態度に刺激を受けてその姿勢を学べる、自分自身の日本語使用について振り返ることができるといった多くの意義があることが明らかになった。

6. 考察

インタビュー調査の結果からは、まず、本科目で実践しているレジユメの作成と発表という活動が機能していることが明らかになった。和田（2018）はレジユメ作成と複数回発表を行い、学生の活動を観察した結果、深い読みが観察されたこと、平山（2013）はビデオ視聴後のレジユメ作成と発表・質疑応答の活動を通して多くの学生が能力向上を実感していることが授業アンケートで示されたことを報告しているが、管見の限り、資料を読んでレジユメにまとめ、発表する活動を留学生自身が評価したものは見当たらない。本調査では、初年次の学部の授業でレジユメを作成していない学生も含め、留学生3名全員が長い文章をレジユメにまとめること、それをクラスメートに説明し合うことが大学での学びに必要な能力向上に非常に役に立つと認識していた。また、学部でレジユメ作成や発表する場合もここで学んだことを活用して取り組めるという。

茂住（2005）は、レジユメ作成では重要な点やその比重を押さえる読解力が必要であるが、

これに問題を抱える学生がおり、今後の指導方法が課題であると指摘していた。本調査では、要点をとるのが苦手だと認識している留学生 A が、空欄補充のワークシートでどのような箇所を抽出すればよいかイメージができたこと、同じ資料を担当したクラスメートのレジュメとの比較が助けとなったこと、それでもわからない場合は教師によるレジュメのフィードバックが役立ったことを指摘している。この流れを繰り返すことで重要箇所のみ抽出するという練習ができたと思われる。

ボランティアの日本人学生からも、留学生の作成したレジュメはわかりやすく、教師が作ったレジュメのようだという評価もあり、この学生たちが通常科目でレジュメの発表をしても大丈夫だと評価された。ただし、説明の仕方は学生によって差があり、レジュメに書いたことを読んでいるだけの学生は説明を補足している学生に比べるとわかりにくく、一部の日本語が流暢ではない学生は一般の大学の授業で質疑応答での聞き取りが難しいかもしれないという指摘があった。「大学生の日本語」BとDは読み書きが中心のクラスであり、口頭発表は「大学生の日本語」AとCのクラスで練習しているが、BとDでもレジュメの効果的な発表の仕方についてもう少し扱う必要があると考えられる。

次に、中級後半から上級レベルの正規学部生を中心としたクラスにおいても、ビジターセッションは、留学生と日本人学生、双方にとって意義のある活動であることもわかった。協力者の正規留学生は3名とも日頃から日本人学生と交流しているが、単に交流だけがビジターセッションの意義ではないことがわかった。日本人学生に参加してもらうことで、日本語科目以外の授業で日本人学生に混ざって発表をするときのような緊張感を持って練習ができ、日本人学生が関心を持って聞いてくれるため普段よりも詳しく説明ができたこと、ビジターセッションの意義を述べている。また、留学生 B のように日本語力が高い学生は日本人学生を相手に説明したりディスカッションしたりすることで、普段以上に受け答えの練習もでき、話し合いも深まると言える。

また、ビジターセッションは留学生だけが恩恵を受けるものだと思われるが、日本人学生にも得るものがあることが確認できた。参加理由としては、留学生と話したい、国際交流をしたいという理由（永井 2012）の他、扱うトピックに対する知的好奇心や貢献したい気持ちも挙げられた。また、ビジターセッションで得られるものとしては、異文化交流に加え、一般の大学生や社会人が読むような新書に書かれた内容について説明を聞いてディスカッションをすることで新しい知識や視点を得ることができること、日本語学習者の姿勢に刺激を受けて自身の外国語でのコミュニケーションや自身の日本語を振り返る機会になるということが挙げられた。

このように双方にとって意義のある活動であることが確認できたが、留学生は日本人学生に発表を聞いて質問したりディスカッションに参加したりしてもらうだけでなく、間違いや不適切な点を指摘してほしいと考えていることが明らかになった。永井（2012）でも、上級クラスの学生の半数が日本人から日本語を教えてもらうことがビジターセッションの意義だと感じていると指摘されているが、同様の結果である。通常の授業では日本人学生からフィードバックを受けられないことも踏まえ、今後のビジターセッションではフィードバックの時間も設けたい。

7. まとめ

本稿では、「大学生の日本語」BとDにおけるレジユメの作成と発表、ビジターセッションの実践を報告し、インタビュー調査の結果から、一連の活動が機能していることと、ビジターセッションは留学生と日本人学生双方にとって得るものがあるということを示した。調査結果からは、課題も明らかになった。今後はレジユメの発表の仕方についてもよりも意識させ、ビジターセッションをする際はフィードバックの時間も設けたい。また、参加した日本人学生は大変満足していたものの、ボランティアとして参加した学生は3名と少なめであった。より多くの日本人学生に参加してもらい、双方にいい影響があるとよいと思われる。

参考文献

- 赤木浩文（2013）「日本語コースにおけるビジターセッションの学習効果と課題」『専修大学外国語教育論集』41、87-104.
- 池谷知子（2016）「留学生との交流授業が日本人に与える影響と意義」『神戸松蔭女子学院大学研究紀要・文学部篇』5、55-70.
- 鎌田美千子（2005）「学部留学生の発表活動に必要な日本語文章表現指導：レジユメ・提示資料に見られる問題点とその指導」『外国文学』（54）、53-66.
- 栗田奈美・金庭久美子（2018）「ビジネス日本語プログラムにおける複眼的評価の有効性」『日本語教育実践研究』6、57-67.
- 桑原陽子・銚田裕子（2020）「日本人大学生と留学生の交流活動の試み」『国際教育交流研究』4、1-15.
- 東京大学 AIKOM 日本語プログラム 近藤安月子・丸山千歌（2005）『上級日本語教科書 文化へのまなざし テキスト』、東京大学出版会。
- 永井涼子（2012）「日本語授業におけるビジターセッションの取組と意義：日本人学生・留学生双方の視点から」『大学教育』9、53-64.
- 平山允子（2013）「大学院進学課程での『レジユメ作成と発表・質疑応答』『小論文の執筆』を目標とした授業」、『日本語教育方法研究会誌』20（1）、100-101.
- 深川美帆・深澤のぞみ・札野寛子・濱田美和（2016）「外国人留学生と日本人学生へのアカデミック・スキル指導についての考察—演習型授業におけるレジユメの分析から—」、『金沢大学留学生センター紀要』（19）、57-68.
- 藤田恵・金庭久美子・丸山千歌（2019）「短期日本語プログラムの授業実践と展望：「成果発表」の指導における課題と改善への取り組み」『日本語・日本語教育』、99-109.
- 村岡英裕（1992）「実際使用場面での学習者のインターアクション能力について：「ビジターセッション」場面の分析」『世界の日本語教育 日本語教育論集』2、115-127、国際交流基金.
- 茂住和世（2005）「学部留学生に対するレジユメの作成指導」『日本語教育方法研究会誌』12（1）、2-3.
- 立教大学 大学教育開発・支援センター（2012・2018改訂）『Master of Writing』
- 和田礼子（2018）『「レジユメ作成と複数回発表」で構成する読解授業の実践』『日本語教育方法研究会誌』25（1）、74-75.